

青森ねぶた祭 起源

ねぶた祭の起源についてはよくわかっていないところもありますが、地域で行われていた眠り流しと呼ばれる伝統行事から発展したものと考えられています。これは子どもの健康を祈るための行事で、7月初めの数日間、木の葉やたいまつを持って夜間に外を練り歩き、疲労や夏の夜の眠気をそれらに移すことで体を清めます。木の葉は太陰暦でいう7月7日に川や海に流されます。日本では太陰暦が1872年まで使われていました。

眠り流しの時期と内容は七夕祭りと重なっています。七夕は星を祭る行事で、奈良時代（710～794）に中国から日本に伝わってきました。祭りに使われる松明はやがて、ねぶたと呼ばれる灯籠に置き換わっていきます。人々は灯籠の中に疲労や悪霊を封じ込め、海や川に流すようになり、そこからねぶた流しと呼ばれるようになりました。時代が下るにつれねぶた流しはねぶた祭へと発展していきます。18世紀前半にはすでにある種のねぶた祭が催されており、初期の頃は箱形の灯籠が使われていました。大きな人型の灯籠が登場したのは1800年代初頭のことです。

現在のねぶた祭では光る巨大なねぶた山車が使われますが、この様式は第二次世界大戦後に定着したものです。このころ、ねぶた山車内部の照明がろうそくからバッテリー式のライトに切り替わりました。観光客からの人気が高まってきたこともあり、ねぶた山車はさらに大きくなっていきます。1980年にはねぶた祭が重要無形民俗文化財に指定されました。祭りの最終日には陸奥湾でねぶた山車の海上運行が開催されますが、起源となったねぶた流しがここに今も息づいています。